

## イネクロカメムシの防除適期について

望月正己・守田美典

(富山県農業試験場)

本虫に対する集団防除の効果を検討するとともに今後に於ける防除適期決定資料を得ようとし、下新川郡朝日町境に於て、早千葉錦を供試しパラチオン1.5%粉剤反当3kg撒布による時期別効果試験を行った。撒布時期は6月末区(6月28日)、7月上旬区(7月7日)、同中旬(16日)および下旬(26日)のそれぞれ1回撒布としそれに無撒布を加えて5処理、3連制とした。イネの耕種は慣行法により9月13日に収穫した。撒布に当つては畦畔をはさんで設定した調査区を中心として撒くこととし田の中央部には撒布を行わなかつた。こうして各々撒布後の虫数変動を調査比較すると第1表のようになった。また、8月5日に於て調査区として選んだ畦

畔沿いに20株について虫数を調べ、畦畔から3株だけ内側に入つて10株をとり生育状況及び被害莖調査を行ったところ第2表のような結果を得、さらに畦畔ぞいの1坪について収量調査を行ったところ第3表に示す通りとなつた。

即ち、撒布時に於ける各区の生育及び虫数をみると、かなりの変動を示し明確な傾向はない。これは、この虫の習性、試験圃場が担当者をちがえた集団であつたこと、初期生育がかなり差を示していたことなど

第1表 撒布前後における虫数変動

調査時	区											
	6月末区			7月上旬区			7月中旬区			7月下旬区		
	生	死	計	生	死	計	生	死	計	生	死	計
撒布前虫数	0	0	0	19	0	19	35	0	35	58	0	58
撒布翌日生死虫数	0	7	7	12	13	25	2	50	52	0	50	50

第2表 8月5日における虫数及び被害莖数

区別	項目 ブツロク	虫数				被害莖数		
		幼虫数	成虫数	総虫数	一茎当り虫数	平均一株莖数	平均被害一莖株数	被害莖数歩合
		(頭)	(頭)	(頭)	(頭)	(本)	(本)	(%)
6月末区	1	224	14	238	11.9	27.4	4.1	9.61
	2	74	9	83	4.2	17.8	1.1	
	3	48	8	56	2.8	22.4	1.3	
	平均	115.3	10.3	125.7	6.3	22.9	2.2	
7月上旬区	1	77	14	91	4.6	16.5	0.5	1.64
	2	3	3	6	0.3	23.8	0	
	3	22	1	23	1.1	14.5	0.5	
	平均	34.0	6.0	40.0	2.0	18.3	0.3	
7月中旬区	1	22	0	22	1.1	15.7	0.1	1.52
	2	18	0	18	0.9	19.0	0.1	
	3	118	12	130	6.5	24.7	0.8	
	平均	52.7	4.0	56.7	2.8	19.8	0.3	
7月下旬区	1	6	0	6	0.3	17.9	0.8	4.62
	2	7	3	10	0.5	22.8	1.7	
	3	55	6	61	3.1	17.7	0.4	
	平均	22.7	3.0	25.7	1.3	19.5	0.9	
無撒布区	1	1	0	1	0.1	11.9	0	5.00
	2	129	10	139	7.0	21.3	2.5	
	3	25	14	39	2.0	26.7	0.6	
	平均	51.7	8.0	59.7	3.0	20.0	1.0	

からみて当然のことであろう。しかし、7月中旬撒布区について同月26日調査したところによると虫数、被害莖の急減をみている。また、各撒布時期について撒布前日と翌日の虫数変動から適否を判定すれば、6月末撒布区と7月上旬撒布区では、越冬成虫がまだ完全にイネに移動していないので撒布後に移動するものが多く、そのため被害莖はふえるし、7月下旬撒布区は完全に移動を終つているため殺虫効果は最も高いが被害莖はかなり増加するため防除時期としてはおそいようで、結局7月中旬をえらぶのがよいらしい。

8月5日の幼虫調査結果からすると、各撒布時期に於ける撒布前と翌日の虫数とが等しかつた。これは6月末区及び7月上旬区は撒布後の移動来集虫によつて被害を高め、7月下旬区は撒布時期のおそいためそれまでに受ける被害が多いためである。また、収量調査結果では、試験田の肥培管理が田によつて異つたため多少の不一致も見たが

虫数と被害莖数の関連に於て最も有効と認められた7月中旬撒布区の収量は最も高位を示した。さらに、この試験方法から案じて越冬場所と目される畦畔や土堤を中心にして撒布すればよく、田の中央部に特に撒布する要はないらしい。また、パラチオン剤は本虫及びニカメイチュウ1化期幼虫の被害を共同的に防げるら

しいことも知られているが、富山県のイネクロカメムシによる被害程度と発生状況を隣県である石川県のそれと比べると相異なるようであるから、やはりニカメイチュウを主体として行くべきであり、イネクロカメムシだけを防除対象とするときは石川県の場合に比べると幾分防除時期の変更が必要であると考えられる。

第3表 坪当収量調査結果

区 別	収量調査 項 目 プ ロ ッ ク	稲	粗	糲	精	玄	玄	屑	精	糲	玄
		藁 重 量 (g)	粒 重 (g)	重 (g)	重 (g)	米 重 (g)	米 20g 粒 数 (粒)	米 重 (g)	粒 重 歩 合 (%)	粒 重 歩 合 (%)	歩 粒 重 合 (%)
7 月上旬区	1	310	440	13	427	352	833.3	5.66	97.04	82.44	1.61
	2	370	480	27	453	365	869.3	14.42	94.38	80.57	3.95
	3	320	432	12	420	347	801.0	5.42	97.22	82.62	1.56
	平均	333.3	450.7	17.3	433.3	354.7	834.5	8.50	96.21	81.88	2.37
7 月中旬区	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2	500	573	53	520	413	842.7	21.36	90.75	79.42	5.17
	3	390	485	20	465	385	830.7	9.64	99.58	82.80	2.50
	平均	445.0	529.0	36.5	492.5	399.0	836.7	15.50	95.17	81.11	3.84
7 月下旬区	1	300	450	10	440	357	828.0	9.45	97.78	81.14	2.65
	2	410	595	114	481	385	821.3	14.56	80.84	80.04	3.78
	3	280	492	13	379	311	783.0	4.24	77.03	82.06	1.36
	平均	330.0	512.3	45.7	433.5	351.0	810.8	9.42	85.22	81.08	2.60
無 撒 布 区	1	290	360	10	350	290	832.0	2.48	97.22	82.86	0.86
	2	420	437	44	393	312	852.0	19.27	89.91	79.39	6.18
	3	320	341	15	326	266	804.3	5.35	95.60	81.60	2.01
	平均	343.3	379.3	23.0	356.3	289.3	829.4	9.03	94.24	81.28	3.02

### 薬剂撒布時期がイネクロカメムシの消長と イネの収量におよぼす影響

川瀬英爾・勝元久衛・石崎久次・水野宇太郎

(石川県農事試験場)

石川県では7月上旬を撒布適期として越冬成虫と幼虫を共に対象として薬剂撒布を行ってきたが、近年の高圧水銀灯の成績によると、越冬成虫が本田に飛来する最盛期は6月第6半旬である。したがって、前記の時期とくいちがい、何れを重点として薬剂応用を行うべきか十分な究明がない。この点を明らかにしようとし、金沢市専光寺町に於て品種は早農林、薬剂はBHC 3%粉、Folidol 1.5%粉を供試し、撒布時期及び撒布量は6月20日(3kg)、7月1日、15日、8月1日(5kg)とし3連制によつて試験を行つた。なお、クビイモチ病防除のため7月5日に3kg、7月25日に5kgのセレスン石灰を撒布している。このようにし

て、まず越冬成虫の消長を要約すると第1表の通りで、1枚の試験圃場に於ける棲息密度を結果からみると、7月1日撒布区が最も多く、7月15日、8月1日撒布区の順となり最も少いのは6月20日撒布区である。6月20日区はホリドール区がやや密度低下を示したのみであるが、7月1日撒布区は飛来最盛期に当たっているため、7月3日調査ではBHC区とホリドール区は極めて明瞭に虫数増加を抑圧している。7月15日撒布区は飛来の最盛期が終つた時であつて、イネに対しては飛来虫の多い時期の撒布ではあるが、このころは越冬成虫の交尾もすでに終り自然に死虫数を増加する時期に当たっている。この区は7月17日調査では撒布区